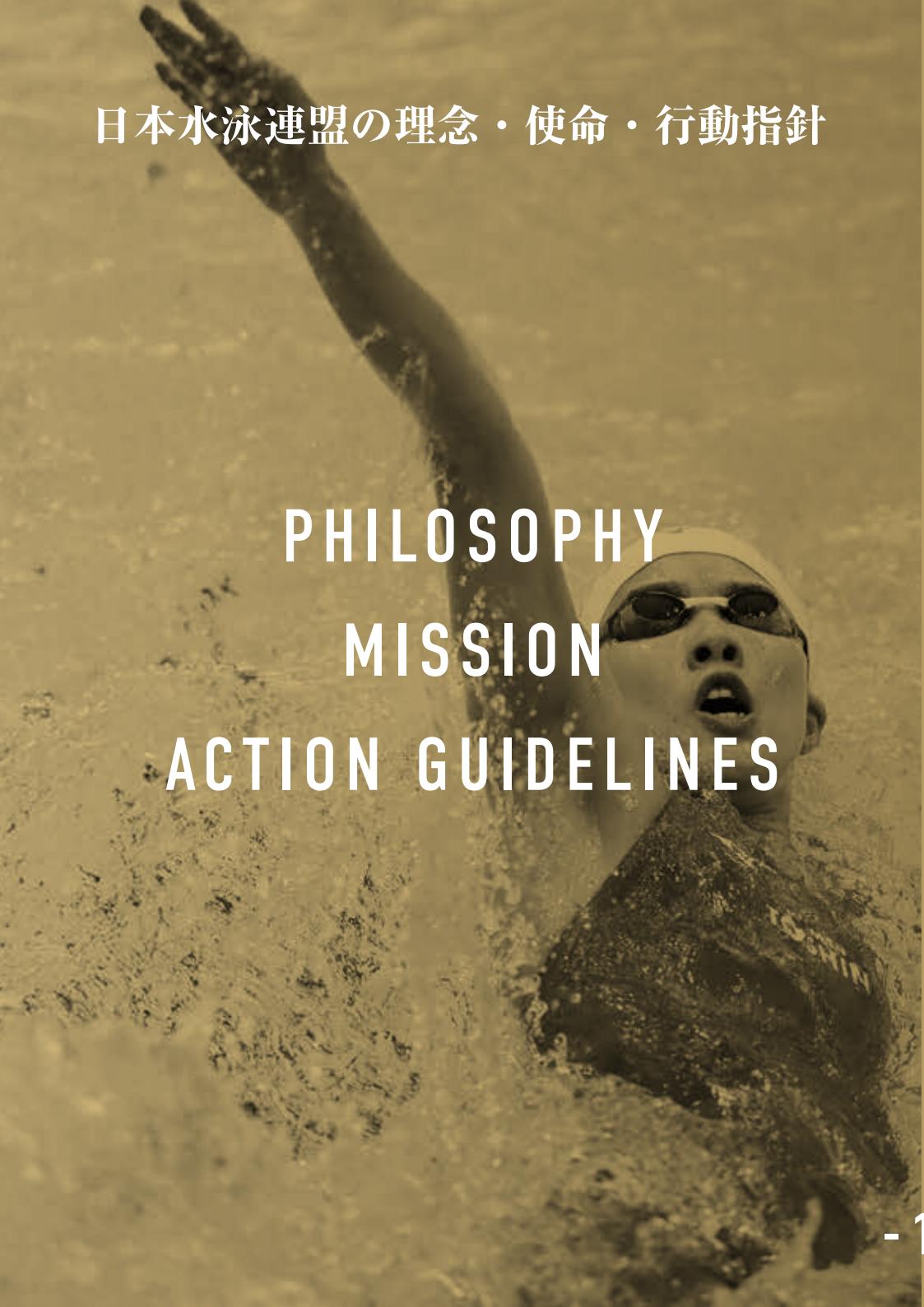




ANNUAL REPORT 2024

公益財団法人 日本水泳連盟
Japan Aquatics





日本水泳連盟の理念・使命・行動指針

PHILOSOPHY MISSION ACTION GUIDELINES

理念

水泳を通じて、国民の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する

使命

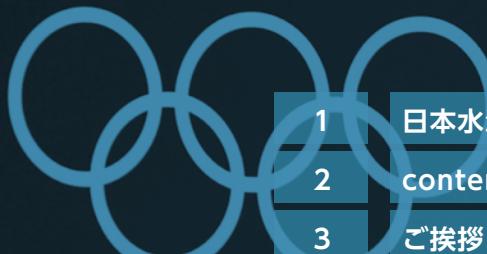
強化：センターポールに日の丸を！
競技力向上に努め、センターポールに日の丸を掲げ、人々に勇気と希望を与える

普及：国民皆泳

水泳の普及に努め、国民皆泳を実現し、人々の健康保持・増進と水難事故防止に貢献する

行動指針

1. 競技力の更なる高みを目指す
2. 水泳の楽しさと喜びを伝える
3. 水泳を通じた教育と交流の輪を広げる
4. 水泳ニッポンの歴史と伝統を明日へつなぐ



PAR

CONTENTS

水泳ニッポン中期計画
2017 – 2024

水泳ニッポン・中期計画
2024 年度進捗報告



1	日本水泳連盟の理念・使命・行動指針
2	contents
3	ご挨拶
4	100 周年記念式典開催
5	Action Plan For The Next 100 Years
7	水の国を、楽しみ尽くそう
8	競技力向上事業：競泳
9	競技力向上事業：飛込
10	競技力向上事業：水球
11	競技力向上事業：AS
12	競技力向上事業：OWS
13	競技運営推進事業：競技開催事業
14	競技推進支援事業：科学／医事／アンチ・ドーピング
15	競技推進支援事業
16	普及事業：指導者養成事業
17	普及事業：生涯スポーツ・環境事業
18	普及事業：OWS 普及事業
19	普及事業：日本泳法保存事業
20	普及事業：機関誌発行事業・広報事業
21	普及事業：アスリート委員会事業
22	総務関係事業

GREETINGS

御挨拶



2025年6月29日
会長 鈴木 大地



- 3 -

2024年、おかげさまで日本水泳連盟は創立100周年を迎えました。1924年10月31日に「大日本水上競技聯盟」として創立以来、先達の不屈の精神と活躍により、水泳を通じて多くの人々と夢や感動を分かち合い、スポーツ界の発展にも貢献して参りました。これまでの輝かしい歴史に恥じぬよう、これからも100年においても、大きな決意をもって挑戦を続けたいと考えています。

選手派遣および選手強化事業では、パリオリンピックにて銀メダル二つを獲得、競泳18歳の松下知之選手、飛込17歳の玉井斗選手と若手選手の台頭があり、2028年に開催されるロサンゼルスオリンピックに向けても希望の持てる成果でした。ここ20年来メダル常勝種目であった競泳、アーティスティックスイミング(AS)が苦戦した一方で、飛込が約100年越しで初のメダルを獲得し、強豪中国の牙城を崩す勢いとなりました。水球は決勝リーグにこそ届かなかったものの強豪国に劣らぬ試合内容が多く、世界で戦うチームとしての顕著な実力向上が見られました。そしてセヌ川で開催されたオープンウォータースイミング(OWS)も、女子10kmでは序盤から上位をキープし、ラスト60mのコース取りにより惜しくも入賞は逃したものの、入賞の可能性を大きく躍進させたレースとなりました。引き続き、戦績の評価と分析を通じて、競泳、飛込、水球、AS、OWSの全部門において、ロサンゼルスオリンピックでの活躍と今後の競技力向上に活かしてまいります。大会を通じて、日本の水泳レベル向上と水泳競技の裾野の拡大につながるとともに、選手や水泳ファンを超えて、より多くの人々が、水泳を通じて明るく健康的な未来へ向けた行動をさらに広めていただければ嬉しく思います。ご支援ご協力をいたいたい協賛・スポンサー各社、加盟団体、関係団体の皆さんに対し、心より感謝と御礼を申し上げます。

競技大会開催事業では、世界選手権(福岡)において証明した国際基準の質の高い大会運営を継続し、国際大会代表選手選考会をはじめ国内競技会において主管団体と連携して、全国で統一した高いレベルの競技会を実施しました。

競技条件整備事業では、競技者登録システム「WebSWMSYS」の安定稼働に注力とともに、超速システム運用実施率の向上

と2025年度以降の超速新システム運用開始に向け、バックエンド、フロントエンドの開発を行いました。

普及事業では、指導者養成3委員会による協議・協働を継続し、スポーツ文化の創造、スポーツの社会的価値向上に貢献できる指導者の養成、減少傾向にある指導者資格保有者数の維持・増加に取り組みました。加速する学校体育における水泳授業の民間委託や学校部活動の地域展開に関連した施策の検討を続けています。

「水泳の日」や「泳力検定制度」、「スイムスマイルプロジェクト」を通じて、水泳離れに歯止めをかけ、水の国を楽しむ仲間「AQUA CREW」の拡大に継続して努めています。また、水泳を通じた教育や環境問題等社会に貢献する活動の一環として未来へつなげるプロジェクト「Wear to Fashion」を実施し、水着やチームウェア等を回収してリユース・リサイクルに繋げる取り組みを行いました。

共通事業では、「スポーツ団体ガバナンスコード<中央競技団体向け>」の適合性審査への対応、ガバナンスコードに基づく規程の見直し、会議や研修会を通じたガバナンスの強化、コンプライアンスの徹底、インテグリティの向上に努めました。

今後の100年に向けたアクションプランとして、新たな名称「Japan Aquatics」、新たなロゴへ進化し、新しい水泳の価値を生み出せるよう「水泳ニッポン・新時代構想」中期計画を発表しました。

財務面は、諸経費の削減努力に加えて自主財源の確立に注力し、マーケティング活動、免税募金などにより、競技力向上事業助成金の減額や物価高騰による支出の増加による減収を最小限に食い止め、本年度事業への充当財源を確保することができました。

結びになりますが、創立100周年を迎え、世界で活躍する選手を継続して輩出し、「水泳ニッポン」を確固たる地位とし、本連盟が存在感のある競技団体として存続するための重要な転換期と考えます。加盟団体の皆様と本連盟の永年の歩みを次代の礎に「水泳ニッポン」の新たな再出発の礎を築く、絶えざる進化により、さらなる飛躍に向けて全力を尽くしてまいります。「センターポールに日の丸を」という強い決意の下、水泳界が一丸となった「オールジャパン体制」をより強固なものにしてまいります。皆様のお一層のご支援ご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

水泳ニッポン中期計画
2025-2032



AQUA CREW



ガバナンスコード



100周年記念式典開催



10月31日、グランドプリンスホテル新高輪にて公益財団法人日本水泳連盟の創立100周年記念式典、そして記念祝賀会が開催された。

記念式典では、過去10年間において水泳界に多大な功績を残された方々、五輪や世界水泳選手権でメダリストおよび世界記録を樹立した選手、メダリスト輩出コーチや育成に携わった指導者を合わせて総勢140人に対して功労章が贈られた。

また、本連盟を支えてくださったスポンサー企業やサプライヤー企業、協賛・協力団体、競技会会場、合宿サポート施設に加え、五輪・世界水泳選手権のメダリスト輩出クラブ（学校）の合計198団体に対して感謝状が贈呈された。

式典後には、記念祝賀会が開催され、こちらは800人を超える来場者のなか盛大に行われ、100周年記念式典実行委員長である金子日出澄副会長兼専務理事の挨拶のあと、鈴木大地会長から『水泳ニッポン・新時代構想』の概要の説明があった。

100TH ANNIVERSARY CEREMONY THURSDAY, OCTOBER 31, 2024

日本水泳連盟の英語表記は、Japan swimming federationから、Japan Aquaticsへ。



それに伴い、『水の国を、楽しみ尽くそう。』というステートメントを発表。

そのために『THE BASIC SPORTS』と水泳を再定義すると同時に、「する」「観る」「支える」の水泳に関わる人たちのコミュニティを『AQUA CREW』と名付け、その両輪でステートメントを実現していくと発表した。

同時に、代表チーム強化のみならず、ジュニア育成、次世代の指導者育成の3本柱で取り組む強化体制に加え、「水泳競技の普及と発展」、「スポーツによる社会貢献」、「組織力と基盤強化」、「人材育成」、「国際競技力の向上」の5つのテーマを掲げた中期経営計画を策定していく。

また、その具体的な取り組み方針として「AQUA CREW」およびステートメントの普及は発信力の強化、ファンサービスの充実、水泳の社会的地位の向上を目標に取り組みを進めていくこと。

「誰もが水の国を楽しみ尽くす」

次の100年を、そのための時間に。鈴木大地会長は力強く訴え、記念祝賀会の挨拶とした。



新たな名称へ、新たなロゴへ

この 100 年の水泳界の歴史の中で、日本中を熱狂させ、偉業を成し遂げられたのは、今日この日まで支えて下さった皆様、そして先輩達が「センターポールに日の丸を」という強化の大方針のもと、懸命にご尽力くださった賜物であります。

これから新たな 100 年の第一歩として、日本水泳連盟の根幹である競技力をさらに強く、太いものとすべく、もうひとつの我々の理念である、水泳の普及活動にも、より一層尽力して参ります。

「日本水泳連盟が作っていきたい景色」を整理するにあたり、まずは、水泳自体が、「水とともに暮らすこと」の裾野を広げていくことが必要だと考えました。

100 周年という節目に、決意の形として、日本水泳連盟は、新たな名称、そして新たなロゴへと進化します。

「水泳」から「AQUA」へ



ACTION PLAN FOR THE NEXT 100 YEARS

つぎの 100 年に向けてのアクションプラン

新ステートメント

「水の国を楽しみ尽くそう」

ロゴとともに、日本水泳連盟のステートメント、つまり我々の存在意義に関する宣言も新たに創案いたしました。

島国であり、水との関わりが深い日本において、水と関わらない生活は考えられません。

「水を楽しみ尽くすこと」は、「人生を楽しみ尽くすこと」。

だからこそ日本水泳連盟は、国民が水を最大限に楽しめる環境つくりに注力し、国民皆水泳（こくみんかいすいえい）という理念を掲げ続けます。

100 周年という節目に、決意の形として、日本水泳連盟は、新たな名称、そして新たなロゴへと進化します。



THE BASIC SPORTS

そして、すべての人が、「水の国を楽しみ尽くす」ために、水との触れ合いの象徴である水泳を、再定義することが必要だと考えました。

水泳とは何か？

水泳はすべての人の役に立つということです。

例えば、幼少期には、水泳は水の事故を防ぐスキルを身につけるだけでなく、身体の丈夫にします。将来どのスポーツを選ぶとしても役に立つ、子供の可能

最後に

「水泳ニッポン・新時代構想」のビジョン、アクションプランを広げていくには、現役選手やコーチだけではなく、OGOB、連盟、スポンサー、そしてファンが一丸となり、歩んでいきたいと考えておりますので、皆様お力添えいただけますと幸いです。

最後に、皆様のご健勝とご発展を祈念いたしますとともに、今後とも変わらぬご支援のほどお願い申し上げます。

ACTION PLAN FOR THE NEXT 100 YEARS

つぎの100年に向けてのアクションプラン

性を広げるためのスポーツであると言えます。

また、中高年の健康づくりを例にとると、水の中では身体を動かしやすく、リハビリなどにも用いられていることや、水泳を通じたコミュニティに属することにより、交流が増えるなど、他のスポーツと比較しても究極の生涯スポーツであると言えます。

これらをまとめて、我々はこのように再定義いたしました。

「ザ・ベーシックスポーツ」。誰しもにとって、基本となるスポーツです。

この概念を浸透させていくためには、「宣言」だけでは足りません。

そこで「する」「観る」「支える」、あらゆる形で水泳に関わる人口を可視化し、増やし、その熱量を高めていけるような仕組みとして、コミュニティを作ることを掲げます。それが「AQUACREW」です。

THE BASIC SPORTS



水の国を、楽しみ尽くそう。

人類の起源は、水の中。

ひとりひとりが生まれる時も、水の中から。

そう考えるとわたしたちは、

生物として根本的に、水とつながっている。

ましてや日本は、水の国。

水と関わり合いのない生活を送る方が、

むしろ不自然できえある。

だからこそわたしたち日本水泳連盟は、

「国民皆泳」を掲げる。

幼少期の体力から、老年期の健康まで、

水とともにつくっていく。

水を楽しみ尽くすことは、人生を楽しみ尽くすこと。

この星に生まれた人類は、宇宙でもっとも運がいい。

この国に生まれた人たちは、地球でもっとも運がいい。



公益財団法人 日本水泳連盟
Japan Aquatics

オリンピック初出場の松下知之が銀メダルを勝ち取る



2024 年度は 7 月にフランスでパリオリンピックが開催され、競泳日本代表は男子選手 14 名・女子選手 13 名の合計 27 名で臨んだ。2024 年 3 月のパリ五輪代表選考会において、「戦えるチーム」をテーマに、選考基準は五輪・世界選手権過去 5 大会における 10 位の最高タイムを派遣標準記録として設定し、選考された選手全員が決勝進出可能なレベルといえる選手団編成であった。また、本大

10 月の日本選手権 (25m) において選考された男子選手 11 名・女子選手 8 名の合計 19 名で臨み、「国際競技力の向上と代表選考会の記録を予選で上回る取り組み、およびロス五輪に向けた複数種目エントリーにおける課題抽出」を目的としたが、結果はメダル獲得が銅メダル 1 個、入賞 11 と課題の残る結果であった。しかしながら、混合メドレーリレー (4x50m, 4x100m) において短水路日本記録ならびにアジア大陸記録を樹立し、競泳においては長水路・短水路併せて 1 年以上更新のなかった日本記録の更新という結果に、また新たな時代が動き始めたという印象を与えた。

競技力向上事業

水泳 SWIMMING

会までの強化事業としてヨーロッパグランプリおよびイタリアの国際水泳セッテコリー 60° 大会にも参戦した。

パリオリンピックでの成績は、メダル獲得が銀メダル 1 個。入賞は個人 10 種目 (9 名)・リレー 3 種目。入賞率は男子個人種目 53.84%、女子個人 25.00%、男子リレー 50.00%、女子リレー 50.00%・混合リレー 100.00%、合計 43.33% であった。パーソナルベストタイムを達成したのは男子選手 1 名・1 種目であり、全体的に非常に厳しい結果であった。

8 月にはオーストラリア・キャンベラにてジュニアパンパシフィック選手権大会が開催され、男子選手 14 名・女子選手 13 名の合計 27 名で臨み、結果は金メダル 6 個・銀メダル 5 個・銅メダル 10 個を獲得し、国別でのメダル獲得数で日本はアメリカに次ぐ 2 位という素晴らしい成績を収めた。

12 月にはハンガリーにて世界選手権 (25m) (2024/ブダペスト) が開催され、

パリオリンピック

メダル	銀 1
入賞	入賞 13

世界水泳選手権 (25m)

メダル	銅 1
入賞	入賞 11

ジュニアパンパシフィック選手権

メダル	金 6	銀 5	銅 10
-----	-----	-----	------

※国別メダル獲得数アメリカに次ぐ 2 位

玉井陸斗が銀メダルを獲得し日本初の快挙を達成



パリオリンピックでは日本飛
界悲願のメダル獲得が達成で
きた。男子高飛込玉井陸斗（須
磨学園3年・JSS 宝塚）が銀メ
ダルを獲得した。この目標達成
を実現するために、「競技会強
化」、「重点強化」、「拠点強化」
を軸とした方策を実施した。
「競技会強化」として、積極的

に国際大会に参加させ競技力向上に努めた。4月開催のAQUAダイビングワー
ルドカップでは玉井が中国の一角を崩し2位に食い込んだ。さらに、急遽開催
されたフランスオープンへ事業変更し参加、この大会はオリンピック本会場と

院高3年）の10位に留まった。今後の次世代
選手育成強化に課題を残す結果となつた。

「重点強化」としては過去の実績を基に、男子
高飛込・玉井陸斗を「メダルアスリート
(MA)」として、女子3m飛板飛込・三上紗也
可の強化を「メダルポテンシャルアスリート
(MPA)」と位置づけ、日本飛込界全体で長期的、
かつ重点的に強化・支援を継続推進し海外合宿
や練習会の頻度を上げて取り組ませた。

「拠点強化」では、これまでの石川県、三重県、
静岡県の公共プールに加え、飛込に特化した
室内練習施設を完備した栃木県の日環アリー



競技力向上事業

なるパリのプールで行われ、プレ大会としての位置づけの大会であった。そこで、玉井は中国の選手2名を上回り見事優勝した。これによって本人の自信につながり国際競技力の向上を実感でき、パリオリンピック本番の快挙に繋がったと考える。また、三上紗也可（日本体育大学大学院1年）も3位となり、本番のオリンピックに向け期待できる内容であった。

パリオリンピックには5名の選手を派遣した。玉井の銀メダル獲得は大いに日本を湧かせ、女子高飛込荒井祭里も9位で惜しくも入賞を逃したが健闘した。

次世代の若手選手の強化育成を目的とし、11月にAQUAマレーシアオープンに4名を派遣し女子高飛込山崎佳蓮（高知工芸大学3年）ならびに西田玲雄（岡三リビック株式会社）2名が上位入賞を果たした。

また、ジュニア強化では11月下旬の世界ジュニア選手権ブラジル・リオ大会に5名の選手を派遣した。結果はAグループ女子高飛込の坂田丹寧（常総学

飛込 DIVING

ナ栃木を「JOC 競技別強化拠点」として認定し、ドライランド練習をはじめフィジカルトレーニングを中心に栃木県スポーツ協会と連携し、多角的なトレーニングが実現できている。

パリオリンピック

メダル

銀1

入賞

入賞1



パリ五輪は予選リーグ敗退も次世代の育成は順調に進む

2024年度、水球はパリオリンピックへ男子のみ出場権を確保し「オリンピック決勝トーナメント進出」を目指して強化事業費を優先投下した。6月には千葉国際水泳場において、欧州強豪国から3名のレジェンドオリンピアンを招致し、日本代表OBを含め「ドリームチーム」を結成して日本代表との壮行試合を有志の支援でイベント化したところ、3,000人を超える観客が来場して、出発前の選手・チームの盛り上げを図ることができた。

その後、ハンガリー、イタリアでそれぞれ調整合宿を実施し、パリへ入国した。日本は、①泳ぐ②判断③展開、全てにおいてスピード向上を意識して、パスラインディフェンスをベースに多彩な戦術を取り入れ総合力的なチーム力を向上させることを重点に置いてきた。

大会では、決勝リーグ進出を叶えるため、予選リーグ第1試合のオリンピックチャンピオンであるセルビア戦で勝利し勢いをつけたかったが、4ピリオド



競技力向上事業

残り1分53秒に同点においていたものの、最終的には1点差での惜敗。その後、フランス、スペイン、ハンガリーに敗戦。最終戦オーストラリアに勝利したが、決勝トーナメント出場を逃した。

10月、ロサンゼルスオリンピックへ向け再スタートを切り、女子は筈井翔太氏が監督に就任し、新体制にて12月にトルコにて開催されたワールドカップ Division 2に参戦、中国を破り優勝。男子は1月にルーマニアで開催されたワールドカップ Division 1に参戦し、第6位となり、それぞれスーパーファイナルへの出場権を得た(Dv1からは6か国、Dv2からは2か国がスーパーファイナル進出)。そして、2月、中国で開催されたアジア選手権へ参戦、男子優勝、女子2位で、それぞれ世界選手権(シンガポール)出場権を獲得した。

予算の配分により、年代別大会には、7月にアルゼンチンで開催された世界ユース(U18)選手権のみ派遣した。今後、各年代別強化事業を拡充していく

水球 WATER POLO

ためには、幅広く支援者を募り強化事業費の確保を検討する必要がある。他方 AQUA奨学金制度で、笹野廉選手(GK)が選出され、欧州クラブへの派遣が叶った。

パリオリンピック

最終順位 11位

※予選リーグ 1勝4敗



メダルには手が届かずとも次世代の存在感を世界に示す

2024 年度は、パリオリンピックでのメダル獲得を最大目標として取り組んできた。チームには新たにアクロバティックルーティンが導入され、怪我のリスクも倍増した。大幅なルール改正もあり、申告した高難度の技の実施を遂行することがメダルへの絶対条件となった。ワールドカップ大会ごとに各国は申告技の難度を更新し、AQUA ルールの更新もされた。ワールドカップフランス大会、カナダ大会と参戦し、情報収集にも努めた。

パリ郊外で最終合宿を行い、パリオリンピックへと臨んだチーム総合の順位は、優勝中国、2 位アメリカ、3 位スペインと高難度のアクロバティック動作を遂行した国が上位に入った。日本はテクニカルで 3 位スタートとしたものの、フリーではアクロバティック動作の実施が認められずに 6 位。アクロバティックルーティンでは実施がすべて認められ最善を尽くしたが点数が伸びず総合 5 位と惜しくもメダルに届かなかった。直前での選手の怪我もあり、アクロバ



競技力向上事業

アーティスティックスイミング ARTISTIC SWIMMING

ティック動作練習に十分な追い込みが出来なかつたことが敗因となった。

デュエットは、中国が優勝、イギリスが 2 位、オランダが 3 位とオリンピックでの初メダルを獲得し、デュエット 2 種目に専念できた国が力を発揮した。チーム出場国のデュエット選手は 5 種目の演技をミスなく泳ぐため、体力と技術力に加えて精神力も必要となる。日本は 8 位入賞となったものの厳しい結果となった。

その後 9 月に行われた世界ジュニア選手権では、デュエットテクニカルで優勝、チームテクニカル・フリーで 2 位、ソロテクニカルで 3 位とメダルを獲得し、日本の次世代の存在感をアピールすることが出来たことは大きな収穫となつた。

2025 年度以降は、ジュニア世代も加わった新生チームでメダル奪回を目指していく。今後の課題としては、まずは体力強化、そしてアクロバティック動

作の向上、男子選手の育成が急務となる。専門家の指導を仰ぎながら強化に取り組んでいく。

パリオリンピック

入賞	2
チーム	5 位
デュエット	8 位



新種目のノックアウトスプリントで日本の存在感を示す

2024 年度はパリオリンピックが開催された年であり、かつてサンゼルスオリンピックに向けたスタートの年度となった。2023 年度の目標であった「パリオリンピック出場権獲得」を達成、ワールドカップの結果等も加味し、男子 20 位以内、女子 8 位入賞を目標に強化事業を推進した。

2024 年度は標高約 1800m のイタリア・リビニョで高地トレーニングを実施した。イタリアでの高地トレーニングからのワールドカップ参戦で女子が 7 位となり、日本チームとして国際大会で久しぶりの入賞を果たした。その後帰国し、パリオリンピック前に再度イタリアで高地トレーニングを実施し、オリンピックに挑んだ。オリンピック前に初めての土地で高地トレーニングを実施するのではなく、事前に実施できたことで、オリンピックに向けて落ち着いて強化に取り組めることとなったと考える。

パリオリンピックでは、女子が 13 位、男子が 15 位という結果であった。

が導入されると、日本人男子選手が初代チャンピオンとなった。国際大会における金メダルは久しぶりであり、日本の OWS 界もようやく世界と戦える力につけてきたといえる。

これは、2022 年度下期より、ナショナルチームの編成に OWS の結果だけでなく、競泳のタイムも基準に入れ、強化を行ってきた結果であると考える。実際に、3 km ノックアウトスプリントで優勝した選手は、競泳のインターナショナル記録も突破しており、OWS において競泳の泳力を高めておくことが OWS の競技力を向上させることを証明したと考える。



競技力向上事業 オープンウォータースイミング

OPEN WATER SWIMMING

男子は目標に届き、女子は目標に届かない結果となったが、女子については、ゴールの 200m 手前までは 7 位であったことから、十分に 8 位入賞を狙える力はつけていたと考える。パリオリンピック開催地のセーヌ川は、とても流れが



早く、レースでは参加者全員が苦戦を強いられた。そのため、OWS レース経験の高い選手が上位に入る結果となった。今回、男子が目標を達成でき、女子が惜しくも達成できなかつたのは、経験値の差であると考える。その後行われた世界ジュニア選手権では、AQUA として初めての種目となる 3 km ノックアウトスプリント

さらに、2025 年 3 月の競泳日本選手権の 400m・800m・1500m 男女優勝者は OWS 選手であったことから、競泳の泳力強化も図れることが実証されていることも考慮し、今後は OWS の国際レースの経験を増やしていきたいと考える。

パリオリンピック

男子	15 位
女子	13 位

新たな取り組みを含めて競技会の充実をはかりファン拡大を目指す

2024年度は、日本水泳連盟創立100周年を迎える、さらなる競技大会の充実に向けた節目の年となった。選手が最高のパフォーマンスができる環境づくりを最優先に、関係者、競技役員が一丸となって取り組んだ。さらには、魅力ある競技会を行うことで、水泳ファンを拡大し会場に来てくれる子供たちを含めた観客を増やす工夫をした。

また、それぞれの競技において、全国規模の競技会を本連盟本部役員・派遣競技役員、開催地の実行委員会、加盟団体競技役員が連携して競技運営に当たり、成功に導くことができた。参加された全ての選手の健闘をたたえるとともに、関係各位のご協力に心から感謝申し上げたい。

前年度末の3月に国際大会代表選考会を実施したことにより、例年4月に実施していた競泳の日本選手権の開催時期をずらした。第100回日本選手権水泳競技大会競泳競技は、東京アクティクスセンター（TAC）を会場として

ムのベスト記録判定を行い、電光掲示板に表示した。

第100回日本学生選手権水泳競技大会（インカレ）は、TACにて、水球競技を皮切りに、4競技を実施した。競泳と飛込は、19年ぶりの合同開催となり、開・閉会式や表彰式を一緒に行い、競泳の昼休みに飛込の決勝競技が実施できるよう相互の競技日程を調整し開催した。

第100回大会としての取り組みとして、100回記念ロゴマークの作成、科学委員会によるレース分析の活用を推進するワークショップ、アンチ・ドーピング委員会とはアウトリーチ活動として各支部選手権の際に学生たちがクリーンアスリート宣言を書き込んだフラッグを作成しインカレ会場に掲出、広報委員会とは学生新聞Awardの創設（優秀賞は明治大学）と、各委員会とのコラボ企画で大会を盛り上げた。

アンチ・ドーピング規則違反の再発防止のため「アンチ・ドーピング講習会」

競技運営推進事業

3月20日から世界選手権代表選考会を兼ねて4日間実施された。今回も翼ジャパンダイビングカップとの共催とし、ライブパフォーマンスとして新たにチアホンの導入、ダンスタイム、ASのエキジビションを実施するなど会場を盛り上げる工夫を行った。久しぶりに観客席が賑わう大会となった。

主催・公認競技大会の開催にはあたっては、主管・共催団体との連絡調整を緊密に行い、企画・立案・運営・予算管理を徹底し、準備から大会終了までを統括した。それぞれの選手が自己の持てる力を最大限発揮できる競技会を実現することができた。

ジャパンオープン2024を11月28日から4日間の日程で開催し、海外からは3か国から30名を超えるエントリーがあった。

第71回全国国公立大学選手権水泳競技大会は、新設されたインフロニア草津アクティクスセンターにて開催。初の試みとして、レースごとに、選手・チー

競技開催事業

を（公財）日本アンチ・ドーピング機構（JADA）のeラーニングシステムを活用し学生に受講させた。その他、飲酒や暴力、ハラスメント等、学生のみならず指導者も含めて啓発活動を行い、学生委員会としてもUNIVAS（一社・大学スポーツ協会）のプログラムを活用し、弁護士によるハラスメント講習会を委員会に合わせて開催し受講した。学生の競技役員養成を継続し、日本選手権等へ派遣し、本連盟の主催競技会の開催支援を行った。

国内競技会

43大会

国際競技会

なし

※ジャパンオープン2024に
海外3カ国30人以上の参加あり

充実した科学、医事サポートとアンチドーピングの啓発を推進

科学事業

競泳の国内主要大会において、競泳委員会および日本スポーツ振興センターと連携し、科学サポートとしてレース分析ならびにレース映像の提供を実施した。分析結果のネット公開に加え、競技会での LINE を用いた映像とデータの配信を行い、競技力向上を目指したデータの普及・啓発を推進した。競泳委員会と連携した合宿サポートとして、エリート小学生研修合宿やナショナル研修合宿における科学サポートを行った。また、レース分析の全国普及を図るための一環として、「SAGA2024 国スポ」会場において固定カメラ映像の撮影およびパンニング映像の自動撮影に関するテストトライアルを実施した。撮影映像は各都道府県における科学委員に向けて配信を行った。

飛込、水球、AS、OWS の各競技については、各委員会と連携し、日本選手権などの全国大会や合宿・研修会におけるサポートを行った（飛込：日本選手権および翼ジャパン、水球：各種国際競技会、AS：日本選手権、OWS：日本選手権ほか）。

アンチ・ドーピング事業

JADA と連携し、主催、主管大会においてドーピング検査（競技会検査）を実施し、選手の権利を守る立場である国内競技団体（NF）代表役員をドーピング検査会場に派遣した。なお、検査対象者は JADA の指示によって指定や抽選で決定した。

また、周知のために本連盟ホームページおよび競技会掲載用のアンチ・ドーピング資料の作成、更新。JADA から通達のあった連絡事項を本連盟 HP にも掲載し、注意喚起を行った。

さらに強化合宿・研修会などへの講師派遣を行い、連盟強化合宿中やコーチ研修会にて、アンチ・ドーピング講習会を行った。派遣講師は原則的に JADA 承認クリーンスポーツ Educator 資格保有者とした。

以下の競技会にスポーツファーマシストを派遣し、出場選手・コーチ向けにアンチ・ドーピングのアウトリーチおよび薬の使用についての相談を目的に、ブースを設置した。

- ・第 100 回日本選手権、ジャパンオープン 2024、第 100 回日本学生選手権、水泳の日 2024・北海道、第 47 回 全国 JOC ジュニアオリンピックカップ夏季水泳競技大会、第 47

競技推進支援事業

医事事業

競技会救護活動：国内主要大会へ救護医師の派遣および医薬品の配備を行い、また国際大会にはおける医事運営への協力：パリオリンピック、ジュニアパンパシフィック選手権大会（競泳・OWS）、世界ジュニア選手権大会（AS）、世界選手権（25m）に帯同医師、トレーナーの派遣を行った。

教育啓発活動として、各種研修会への講師派遣、JSPO 公認スポーツドクター、JSPO 公認スポーツデンティスト、AT 養成講習会への受講者推薦を行い、人材育成に努める。

各地域でのメディカルサポート体制を充実させることを目的に、全国を 6 ブロックに分けて医師とトレーナー合同で研修会を実施した。今後も継続していく予定である。

また、近年対応が急務となっている脳振盪においても、ワーキンググループを立ち上げ、動画資材を制作し、地域指導者委員会の協力を得て各加盟団体に周知を行った。

また、アスリート委員会と連携し、WHP (Women's Health Project for Japanese Swimmers) 講習会プログラムを作成し、地域指導者委員会の研修会に講師を派遣した。日本水泳連盟のホームページに動画教材、教育用資材を展開することができた。

科学／医事／アンチ・ドーピング

回 全国 JOC ジュニアオリンピックカップ春季水泳競技大会、第 78 回国民スポーツ大会佐賀

スポーツファーマシストによる医薬品相談・ホットライン体制は継続して行っており、年間 200 件程度の問合せに対応している。

また、学術活動として第 26 回水と医学研究会にて演題「教育に重点を置いた水泳競技会でのアンチ・ドーピングのアウトリーチ実施と課題について」を発表。水と健康医学研究会誌（第 25 卷）に「日本水泳連盟「薬の相談窓口」の利用状況について～2018 年から 2022 年の集計結果より～」を投稿した。



① 競技者登録事業

- ・WebSWMSYS の機能改修を実施。登録の安定化を図る。

② 競技規則制定事業

- ・水球、AS については World Aquatics が規則の改定を行ったため、国内での競技会で適切に対応できるよう速やかな対応を実施。

③ 競技役員養成・登録事業

- ・公認競技役員・審判員養成のためのブロック研修並びに加盟団体主催講習会は全て予定通り実施。
- ・日本選手権(25m)、ジャパンオープン 2024、日本選手権の3大会に、全国各都道府県から 124 名が競技役員として参加し、研修を実施。
- ・第 3 エンブレムが発表となったことで、競技役員ユニフォームを変更。今後 4 年間を移行期間として切り替えを実施する。

④ 競技記録公認・管理事業

- ・加盟団体の協力により、大会終了から 3 日以内の公認記録結果報告は定着しつつある。
- ・超速システムの運用実施率向上に取り組み、半数以上の加盟団体で実施された。
- ・記録管理、報告システムを構築したサイトを活用して安定化の推進を図る。

⑤ 施設用具公認事業

- ・プール及び施設用具に関する検査を行った。詳細は表の通り。
- ・水泳及び水泳競技に使用される用器具類やシステム等の公認・推進規程に基づく推薦商品認定を実施。詳細は表の通り。



競技推進支援事業

施設用具公認事業の表①

公認プール	50m	25m	飛込	水球	標準
新規	3 件	4 件	1 件	0 件	0 件
再公認	34 件	53 件	6 件	0 件	2 件

施設用具公認事業の表②

新規公認企業	0	企業	0	商品
新規推薦企業	2	企業	2	商品



指導者の質向上に向けて継続した養成事業を

前年に引き続き指導者の普及・拡大に向け、各指導者資格の目的・意義の再確認と周知を図りながら養成講習会参加者数増と更新率の向上を目指した。

地域指導者委員会による基礎水泳指導員の単年度登録者数は昨年に比べて 144 人減の 928 人、水泳コーチ 1・2 の登録者数は 477 人減の 8,467 人となった。6 月に開催された全国地域指導者（普及）委員長会議では、基礎水泳指導員・水泳コーチ 1・2 の更新研修の充実ならびに新規養成の活性化および、これにかかる諸問題の解決のため、加盟団体相互の意見交換の場を設け、好事例の共有化を図った。引き続き加盟団体の協力の下、指導者養成事業を推進する。

競技力向上コーチ委員会では、新規養成講習会をオンライン形態で開催し、115 人（コーチ 3:101 人、コーチ 4:14 人）が修了。また、免除適応校によるコーチ 3 の新規取得者数は、81 人（前年比 14 人減少）であった。

資格保有者向けの更新研修会は、2023 年度と同様にオンラインで実施し、コーチ登録者数は 2025 年 3 月現在 3,885 名となった（前年 4,028 名対比 143 名減少）。

水泳教師委員会では、（一社）日本スイミングクラブ協会（SC 協）と連携し、養成・研修



普及事業 指導者養成事業

会事業を実施した。資格所持者数の減少とともに JSPO と SC 協との組織連携を行い、新しいシステム化の導入が急務である。教師登録者数は、2025 年 3 月現在 2,243 人（対前年比 71 人減少）と減少傾向が続いている。

引き続きの課題である運動部活動の地域展開や小・中学校水泳授業の民間連携の動きを視野に入れて水泳の安全性と指導者の資質向上を目指し、公的資格保有の義務化も視野に入れた JSPO の施策と連携し、指導者養成事業を展開していく所存である。



新たな取り組みを含めて競技会の充実をはかりファン拡大を目指す

①日本スポーツマスターズ大会

本年は長崎県・長崎市民総合プールで開催。本大会は、生涯スポーツのより一層の普及と振興を目的とした、JSPO との共催によるスポーツ愛好者の中で競技志向の高いシニア世代を対象とした大会である。本年度は、42 都道府県から 903 人が参加し、10 年連続出場者 11 人、20 回出場者 4 人の方々の表彰式も実施された。競技ではマスターズ日本新記録 5 個、大会新記録 37 個が樹立され、大いに盛り上がった。

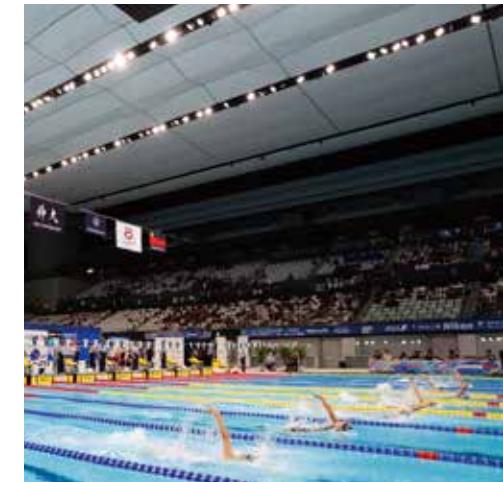
②水泳の日 2024

9月 22 日に北海道江別市の北海道立野幌総合運動公園プールにおいて、「水泳の日 2024・北海道」を開催した。このイベントは、本連盟の掲げる使命の 1 つ「国民皆泳」を目指した事業であり、世代を超えて、「命を守ることができるスポーツ」水泳のさらな

る普及発展、競技力向上、競技人口の裾野を広げるきっかけとして実施されている。なお、2024 年度は、主催が本連盟、(一社)日本スイミングクラブ協会、(一社)日本マスターズ水泳協会、(一社)日本パラ水泳連盟の水泳 4 団体と、(一財)北海道水泳連盟、江別市水泳連盟、共催に北海道、江別市を迎えて開催した。加盟団体主催では、東京会場、郡山会場、愛知・名古屋会場、近畿ブロックとして滋賀会場、高知会場、広島会場の 7 会場にて開催された。

③泳力検定

本事業は、生涯スポーツとしての水泳の普及を目的に 1998 年から実施している。トビウオジャパンの活躍もあり、日本水泳界が一段と盛り上がりを見みせている中で、泳力検定会も全国各地で開催され、泳力検定事業が水泳愛好者に浸透してきたことを示している。本年度もオリンピアンをゲストに招き「ニチレイチャレ



普及事業 生涯スポーツ事業

ンジ特別泳力検定会」を東京・愛知・福島・高知・岡山・青森など全国 24 力所で開催した。また、さらなる泳力検定の普及のため、泳力検定システムの運用促進や HP および公式 SNS を活用した広範な情報発信に努めた。

④環境活動「Wear to Fashion」

スポーツによる社会貢献活動の一環として、衣類の循環で「捨てない選択肢」を提供し、未来へつなげるプロジェクト「Wear to Fashion」を実施し、水着やチームウェア等を回収してリサイクル・リユースに繋げる取り組みを競泳競技のみならず、主要競技会複数の大会にて実施した。



安全と普及の両輪で OWS の推進を進める

OWS の安全な普及に必要な事業を、以下のとおり実施した。

① OWS スイムクリニック、OWS 検定事業を開催。

スイムクリニック参加者合計は 202 人。 検定参加者は 128 人にも上った。

② OWS 審判員養成

審判講習会（4月7日・1月26日リモート開催、5月15日対面開催）を行い、競技審判員の養成を行った。参加者は合計で 98 人。

③ OWS 公認コーチ養成（新規申込者）

OWS 公認コーチ 3 養成講習会は 8 人、OWS 公認コーチ 4 養成講習会は 1 人が新規で申し込みがあった。また、認定 OWS 大会の標準化と拡大を図り、認定 OWS 大会の支援を行った（2024 年 6 月～11 月）。以下の 16 大会において審判員・安全管理員派遣した。派遣大会：静岡お茶・阿久根・南紀田辺・中海・尾鷲・佐渡・館山・琵琶湖・屈斜路湖・青森あさむし・湘南・愛知りんくう・泉南・せとうち・須崎・徳之島（合計 4,973 人の参加）

④ 認定 OWS 大会・全国担当者会議の開催

2024 年 12 月 14 日・対面／リモート会議開催とした。

⑤ 認定 OWS 大会 サーキットシリーズ年間優秀選手表彰

全 16 大会ポイントランキング男女各総合 1 位に優勝楯を進呈、年代別男女各上位 3 位までに表彰状とスイムタオルを進呈した。



普及事業 OWS 普及事業



プロモーションビデオで世界に日本泳法を発信

① 第 69 回日本泳法大会

本大会は、わが国近代水泳史の礎となった日本泳法の後継者育成と、技能の保存と普及を目的として、1956 年より開催され、現在は、現存 13 流派のジュニア（中学生以下）からシニア層まで幅広く参加できるよう、12 種目の競技と 7 資格の審査から成っている。本年度は、8 月 24 日～ 25 日の日程で広島県広島市において開催した。全国から役員、選手併せて 536 名の参加があり、予定した各競技と資格審査をすべて実施することができた。

② 第 72 回日本泳法研究会（課題：水任流）

今回は、3 月 22 日・23 日の日程で香川県高松市に於いて、当地で継承される「水任流」を課題として開催したところ、全国からおよそ 250 名の参加があった。初日は、上東師範による水任流の歴史と主に「肱抜手游」についての研究発表があり、2 日目には香川県立総合水泳プールにおいて、水任流泳者による実技発表の後、多くの参加者がプールに入って水任流泳法、特に、今回テーマとなった「肱抜手游」を体験した。



普及事業　日本泳法保存事業

③ 游士資格審査会、日本泳法研鑽会

10 月 13 日に、千葉県国際総合水泳場に於いて、游士審査会（千葉会場）と第 20 回日本泳法研鑽会を実施した。游士審査会（千葉会場）の参加 3 名、合格 2 名。第 20 回日本泳法研鑽会は参加 12 名であった。

3 月 23 日に、香川県立総合水泳プールに於いて、游士審査会（香川会場）と第 21 回日本泳法研鑽会を実施した。こちらの游士審査会（香川会場）は受査 2 名、合格 2 名。第 21 回日本泳法研鑽会への参加は 6 名であった。

④ 日本泳法プロモーションビデオの活用

日本泳法の認知度を国内外において高めるための広報施策として、2022 年度に制作した日本泳法プロモーションビデオを、日本選手権（3 月）ほか、様々な場面で活用を図った。

また、2025 大阪・関西万博において、EXPO アリーナ「Matsuri」の EXPO VISION で上映する映像コンテンツ作品として採用され、今後、世界からの来場者に向けた日本泳法の良い PR 機会を得ることができた。

⑤ 水泳の日 2024・北海道への協力

9 月 22 日に開催された『水泳の日 2024・北海道』において、小樽の向井流水法会の演技披露と日本泳法クリニック（Samurai swimming）を実施した

⑥ その他

第 69 回日本泳法大会と第 72 回日本泳法研究会の開催に併せ、「流派連絡会議」「資格審査専門委員会」を開催した。また、第 69 回日本泳法大会の前日と、第 72 回日本泳法研究会 2 日目に「審判研修会」を実施した。

ホームページの充実と大会における報道対応の2本柱

① 機関誌「月刊水泳」発行事業

2024年度は競泳のパリオリンピックの選考会の様子からスタートして誌面を賑わせてくれた。また、各種別においてオリンピック本番に向けた試合のリポートの掲載、そしてパリオリンピックの速報、詳報を掲載することができた。同時に国内大会のリポート、結果掲載も充実させることで広く選手たちの活躍を伝える記事を掲載した。秋から冬にかけては、2028年のロサンゼルスオリンピックに向けた各種別の海外遠征や合宿の様子を掲載することができ、新しいスタートの様子を伝える事ができた。

② ホームページ(HP)の管理・更新事業

各専門委員会のHP担当者(更新担当者)に向けて講習会を実施。事務局管轄の事業以外のHP更新作業については広報委員会に一本化。またトピックス、NEWS、委員会のお知らせの役割と方向性についても説明し、特に各種別の担当者は理解いただき、円滑な更新が可能となった。また、大会リポート等の外に向けた発信はNEWSに集約した結果、NEWSページへのアクセス数が増加。さらにトピックスの場所を活用して月刊水泳に掲載している記事を1カ月遅れを目途にWEB版として掲載。こちらも好評で、今まで月刊水泳を読んでいた

④ 公式SNS

パリオリンピックの盛り上がりもあり、特にInstagramのフォロワーが急増して1万人を突破。X、Facebookについては微増という状況であった。



普及事業 機関誌発行事業・広報事業

かった層に対して新規にアプローチすることができた。

2024年度アクセス数：1000万PV・ユニークユーザー数：200万

③ 報道対応事業

各種別の競技会担当者と連絡を密に取り合うことで、円滑な対応をすることができた。プレスの来場制限については、一部(WEB媒体および学生新聞)を除き撤廃。ミックスゾーンで取材する幅が広がり、地方紙も含めて多くの選手がプレスに取材してもらえる体制に戻すことができた。日本学生選手権では、競泳会場にて学生新聞へのアプローチとして『学生新聞Award』を実施。参加校は5校と寂しい状況ではあったが、表彰式等を見た学生新聞の記者たちが興味を持ってくれた様子。2024年度以降も継続する予定なので、事前広報含め学生委員会と連携を取っていく。新しく広報委員会スタッフの設立に向けた準備を進め、競技会における報道対応体制の充実を図った。若手の育成、全国への広報スタッフの充実を今後も進めていく予定である。

広報事業 公式SNSの表

フォロワー数	Instagram	X	Facebook
日本水泳連盟総合	11,767人	4,037人	1,962人
競泳	19,921人	112,000人	22,000人
飛込	2,388人	669人	177人
水球	8,377人	3,877人	7,161人
A S	5,591人	—	286人
OWS	2,432人	—	—

① 現役アスリートの意見集約

パリオリンピック競技大会 2024 パリ大会終了後、代表選手に対しアンケートを実施した。各自の振り返りと、強化体制の拡充のために組織として必要な提案を集約のうえ、日本水泳連盟執行部へ報告し意見交換を行った。選手からはここで出た意見をもとに、より選手目線に立った強化体制の改善が検討されるきっかけとなったとの評価を得た。

② 現役アスリートへのサポート

医事委員会、競技力向上コーチ委員会と協力し、女性水泳選手が抱える健康問題に対し、選手・指導者・保護者などを対象に教育・啓発・課題抽出・受診環境整備を行い競技力向上に寄与する目的で活動するプロジェクト (WHP) を立ち上げて講習会を実施した。

③ ジュニアアスリートへの動機づけ

JOC 全国ジュニアオリンピックカップ水球競技大会（春季）にて、ジュニアアスリートを対象としたオリンピアンによるトークイベントを実施した。水球日本選手権決勝の入場時において、ジュニア選手によるエスコート・キッズ企画を実施し、ジュニア選手の動機づけ



普及事業 アスリート委員会事業

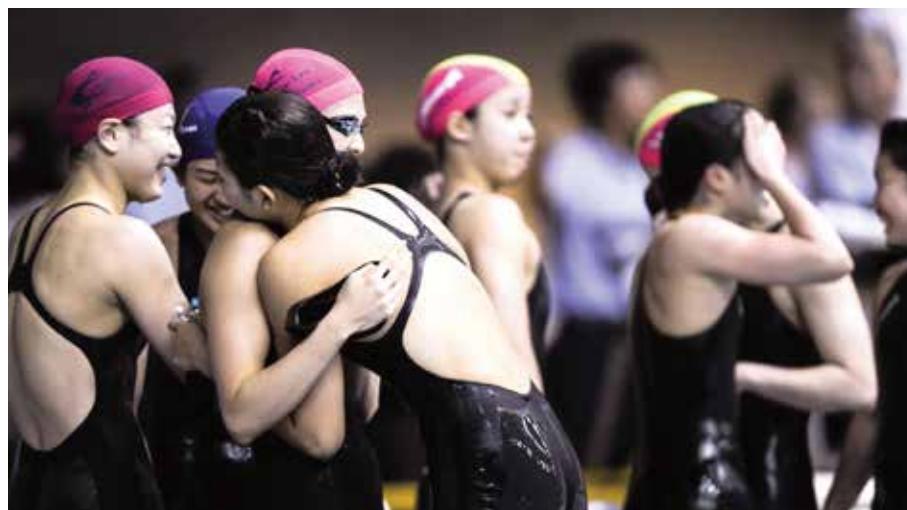
を行った。競泳日本選手権ならびに JAPAN OPEN において First Swim Ceremony を実施し、子供たちに日本代表選手などが力泳する TAC で観客を前にして泳ぐ機会を提供し、動機づけと家族や友人などが会場へ足を運ぶきっかけを提供した。

④ 水泳の普及への貢献

水泳の日、泳力検定、スイムスマイルプロジェクトへオリンピアンを派遣し、普及活動を行った。ユニセフ「子どもの権利とスポーツの原則」の宣言【すべての子どものすこやかな成長のための水泳環境づくり宣言】の PR 動画を各競技会において放映し、子どもたちが楽しく、安心して、水泳に打ち込める健全なスポーツ環境の実現に向けてメッセージを発信した。

⑤ オリンピアン OBOG 会のネットワーク強化

競泳日本選手権、日本学生選手権、JAPAN OPEN において、オリンピアンズシートを設定し、オリンピアン OBOG に大会へ足を運んでもらい、本連盟事業への理解と協力ならびに、水泳普及事業への協力を依頼した。



ガバナンスコードの徹底と中期計画の策定を進める

本連盟各会議および地域会議の準備・開催を通じて、内外の関係者・関係団体との情報共有および意思疎通を図り、円滑な業務遂行を図った。「水泳ニッポン・中期計画 2017-2024」の進捗管理、創立 100 周年事業とあわせて「水泳ニッポン・新時代構想」なる新たな中期計画の作成・公表を行った。「スポーツ団体ガバナンスコード<中央競技団体向け>」の適合性審査の更新対応および内容に準拠した各種規程の改廃・策定を継続して実施した。本連盟事務局の労務環境を管轄し、各種業務の効率化を目指す取り組みを実施した。

① 地域会議の開催

例年のとおり、10 月から 12 月にかけて全国 9 ブロックの各地に出向き、本連盟の事業方針や重点施策についての説明、質疑応答、情報交換を実施した。

② 中期計画の進捗管理・公表

「水泳ニッポン・中期計画 2017-2024 (2023 年度進捗報告)」を本連盟 HP に掲載し、掲げた目標の進捗状況を報告した。今後の 100 年に向けたアクションプランとして 2012 年に発表した「ドリームプロジェクト 2020」での取り組みを継承しつつ、新しい水泳の価値



総務関係事業

を生み出せるよう「水泳ニッポン・新時代構想」を策定し、公表した。

③「スポーツ団体ガバナンスコード<中央競技団体向け>」の適合性審査の受審

スポーツ団体ガバナンスコードの適合状況に関する審査書類と証憑書類の提出を行い、4 年ごとに義務付けられた適合性審査を受審し、問題なく受理された。また、ガバナンスコードに準拠した各種規程の改廃・策定を継続して実施した。

④ マーケティング事業

各競技会における支出削減を図り、予算に合わせた適正な大会運営を実施した。協賛各社については、現行の協賛内容の継続、ご支援をいただいた。オフィシャルスポンサー、オフィシャルパートナー、オフィシャルサプライヤーをはじめ、協賛各社に心より感謝したい。また、公募により 2025 年度以降のマーケティング代理店および大会運営支援業務に関する旅行専任代理店の選定を行い、契約を見直した。

⑤ その他の普及事業

本連盟公認キャラクター「ぱちゃぱ」を活用したライセンス事業を、関係企業と連携して実施した。あわせて、本連盟が所有する標章等についてブランド保護、信頼性向上、経済的利益獲得のために商標登録を行い管理を徹底した。



公益財団法人 日本水泳連盟
Japan Aquatics

